

Neues in Nara

Nr. 95

2026 (令和 8) 年 6 月 30 日

Japanisch-Deutsche Gesellschaft Nara (JDG-Nara)

奈良日独協会 (会長: 河野良文) 〒630-8133 奈良市大安寺 2-18-1 大安寺内

Tel/0742(61)6312 Fax/0742(61)0473

<https://www.daianji.or.jp/jdgn>

編集: 横山 香 (pnhkmts@yahoo.co.jp)

● 行事報告 (1) 2026 (令和 8) 年度 奈良日独協会総会および 第 32 回シュタムティッシュを開催しました

5 月 31 日 (日) 14 時から大安寺・催事棟で開催した総会には 22 名が出席。委任状 39 通を合算して会員 (96 名) の半数を超えたため、総会は成立しました。

冒頭の挨拶で河野会長は今を時めく ChatGPT に「奈良日独協会ってどんなところ？」と質問してみたら、「日独の精神文化の架け橋になっている団体」という模範的すぎる (?) 回答が返ってきたと紹介され、会場の空気をほぐして下さいました。続いて議長に隅田憲孝理事を選出して議事に移りました。

議案は、25 年度事業報告、25 年度会計報告、25 年度会計監査報告、26 年度事業計画案、26 年度予算案の 5 件で、審議の結果、すべて承認されました。昨年度から変わった点としては、ドイツ語会話講座の中級 (経験者) クラスが再開されたこと。まだ受講生が少ないので、ドイツ語を学び直したいかたは担当の水野恵理子理事までお気軽にお申込み下さい。



総会・シュタムティッシュの様子

総会終了後は、第 32 回シュタムティッシュとして茶話会を開きました。ドイツとの関わりをおひとりずつ話していただきましたが、気付いたら予定の 4 時を大きく超える盛況ぶりでした。

中祢 勝美 理事・事務局長

● 2026 (令和 8) 年度 全国日独協会連合会年次総会報告

2026 年度全国日独協会連合会年次総会が 4 月 17 日 (金)、東京大森の日立製作所会議室で開催され、全国 23 の協会が参加しました。

東原敏昭会長は挨拶で、国際情勢が不安定な中、国家間での法のルールに基づく交流と民間の連携が益々重要になると指摘されました。来賓 3 名の最初に挨拶されたシュテファン・ビーダーマン在日ドイツ大使館文化部長は、今日の世界情勢で、日本とドイツの共通点は、戦争が近場で起こる可能性が危惧されると強調されました。続いて、ユリア・ミュンヒ ベルリン独日センター事務総長・独日協会連合会若者担当理事、最後にオリバー・ポール独日青少年協会会長が挨拶されました。その後、決議・報告事項と進みました。

午後、各地日独協会の報告があり、多くの協会から会員の高齢化が進み、会の若返りに苦慮しているとの実情が紹介されました。

その後、ミュンヒ氏の『金沢』、『ベルリン』、そしてその先へ一日独交流における市民社会の歩み、成果、そしてこれから」と題した独日協会連合会

2 ページに続く

の活動報告があり、さらに基調講演・パネルディスカッションと続きました。

基調講演では、前沢浩子氏（獨協大学学長）が「ドイツに学ぶ、ドイツと学ぶ」と題し、大学は自分探しの場所ではなく、自分をつくる場所であり、AI時代の人文知、AIにはできない普遍的価値として、対話能力、相互理解、そして平等な議論があると述べられました。

前沢学長による日独関係の歩みとこれからの展望についての示唆に富む講演に続き、パネルディスカッションでは、相澤啓一氏（獨協大学外国語学部ドイツ語科特任教授・筑波大学名誉教授）から、自らが主宰する「インターユニ・ゼミナール」について、生駒美喜氏（早稲田大学政治経済学術院教授・日本独文学会会長）からは早稲田大学ドイツ語学生の会「DMS」について、早坂君子氏（慶応義塾大学大学院博士課程）からは、自らが代表の若者主体の自主的ワーキンググループ



「独日どこに」についてのプレゼンテーションがあり、活発な意見交換が行われました。

閉会后、駐日ドイツ大使公邸で開催されたレセプションでは、マルティン・フート駐日ドイツ大使館首席公使の歓迎挨拶と乾杯の後、フート公使をはじめ、参加の各日独協会の皆さんと交流を深める機会になりました。

（写真は総会に出席した加藤副会長夫妻と、マルティン・フート駐日ドイツ大使館首席公使）

加藤 禎孝 副会長

● 行事報告（２）

第 16 回ドイツ料理教室を開催しました

- 開催日時：2026 年 6 月 13 日（土）
13：30～16：00
- 会 場：奈良市生涯学習センター3 階キッチン
グループム
- 講師：土井ギーゼラ先生・土井通靖先生（奈良日独協会会員）
- 参加人数：15 名

以下、料理教室参加者 由本真理さん（奈良日独協会会員）からの報告です。



今回は、講師の土井ギーゼラ先生、および土井通靖先生のご指導のもと、参加者の皆様とともに「キノコのカボチャキッシュ（Kürbis-Quiche mit Pilzen）」を作りました。

調理に先立ち、土井ギーゼラ先生よりキッシュについてのお話がありました。キッシュの発祥はフランス東部のアルザス地方であること、また本日作るキッシュはドイツの家庭でよく作られているドイツ風のレシピであることをご説明いただきました。



今回のキッシュにはコンキリオニ（貝殻）のパスタを使用し、見た目にも楽しい一品となりました。

調理ではカボチャを粗くおろす作業がありました。なかなか力のいる作業で、参加者の皆様も苦勞しながら協力して取り組みました。そのほか、生地作りから具材の準備、焼き上げまでを丁寧に学ぶことができました。

焼き上がったキッシュは、皆で切り分けて試食しました。



カボチャの自然な甘さとモッツアレラチーズの程よい塩味が良く調和し、とて

もおいしいと好評でした。キノコの風味も加わり、彩り豊かな家庭料理を楽しく味わうことができました。

試食時には料理の感想やドイツの家庭料理について話し合いながら、和やかなひとときを過ごしました。講師の先生、参加者の皆様、ありがとうございました。

※ドイツ料理教室は松本 俊郎理事が担当しています。

● 新理事の紹介 小山 泰子さん

2025 年 6 月の総会で新たに理事に就任しました。おもに国際交流イベントとクリスマス会を担当させていただくことになりました。分からないことも多くご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

私は大学でドイツ文学を専攻し、ドイツ語を学ぶようになりました。母校の学習院大学はバイロイト大学と姉妹校で、夏休みには大学主催のバイロイト大学での夏季語学研修が毎年企画されており、2 年生と 3 年生の時に参加しました。

日中はバイロイト大学での語学の授業に参加し、滞在はホームステイ形式。実際にドイツ人家庭で日々ドイツ語の響きの中に身を置き、ドイツ人の暮らしやメンタリティーを肌で感じながらドイツ語を学べたことがとても楽しかったのを覚えています。

せっかくなのでもう少し深くドイツ語を勉強したいと感じて、留学できる機会を積極的に探していたところ、ドイツ語の全国弁論大会で準優勝したことで DAAD（ドイツ学術振興会）から 2 ヶ月のドイツでの語学研修の機会をいただきました。



それはコンスタンツ大学で夏季に開催されていた Goethe-Institut 主催の語学研修でした。世界中から集まったドイツ語を学ぶ学生と寮生活を送ったのですが、寮生活では一緒に料理したり、出掛けたりしながら親睦を深め、授業では様々なテーマについて意見交換をするので、それぞれの国民性が垣間見えて、まるで世界の縮図を体験するようなどても貴重な機会になりました。

そして最終的にはロータリー財団の国際親善大使として 1 年間、ボン大学に留学することが叶いました。ボン大学では大学の授業を履修しつつ、修士論文の文献収集と準備を進めて、最終的に修士論文はドイツ語で執筆しましたが、その課程で自分には論文執筆は向いてないと痛感し、修士課程修了後はフランクフルトにヨーロッパ支社がある大手電機メーカーに就職しました。国際営業部の配属ではあったものの残念ながら担当地区がアメリカとなり、2 年間で退社したのですが、社会人としての基

礎は学ばせていただいたように思います。

その後、ボン大学留学時代に学んだゲーテの自然観からドルフ・シュタイナーの世界に興味を持つようになり、シュタイナーの文献を読み解く際に、ドイツ語がとても



役に立ちました。療法的音楽教育者養成コースで学び、ドイツの施設に研修をかねて見学に行くこともあり、とても充実した日々でした。

その後、出産と子育てをしつつ、生まれ育った横浜から奈良に引っ越してきたのは 2012 年です。妊娠出産後はドイツ語を使う機会もすっかりなくなってしまったので残念に思い、日独協会を検索したところ、自宅から比較的近くの大安寺が奈良日独協会の本部と知って、嬉しくて小躍りしたのを覚えています。ドイツ語は半分忘れてしまいましたが、異文化交流の場は今でもとても好きです。今は楽健法（二人ヨーガ、踏みヨガ）のセラピストとして、楽健法の踏み方クラスを主催しており、いつかドイツに楽健法を広めに行きたいと夢見ています。

● 新入会員の紹介 神村朋佳さん 「児童文学との出会い、ドイツとの出会い」

私は大学で児童文化、児童文学を教える傍ら、学校や図書館で絵本の読み聞かせや昔話の語り（ストーリー・テリング）をする「お話配達」の活動も続けています。

幼い頃からお話が好きで、小学生に上がる頃にはすっかり本の虫でした。そんな私がとりわけ面白がり、魅了されたのがドイツ、北欧の作品でした。オトフリート・プロイスラーの『小さい魔女』、『大どろぼうホッツェンプロッツ』、ミヒャエル・エンデの『モモ』、『はてしない物語』などなど。

私に物語の世界を開いてくれたのは父でした。我が家では、夜、寝る前の読み聞かせは読書好きの父の役目で、毎晩、少しずつ、昔話を読んでくれました。私にドイツ語を最初に教えてくれたのも父でした。大学でドイツ語を学んだ父は、ラジオを聴きながら、急に「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の意味を嬉し気に開陳したりし始めるのです。そんなわけで、いつ頃からか、私は、大学生になったらドイツ語を学び、ドイツの児童

文学を研究するのだと、なんとなく心に決めていました。

それから何十年。結局、ドイツ語はろくに身につかず、特にドイツの児童文学を研究しているわけでもありませんが、私の人生は、子ども時代の物語との出会いによって方向づけられたのだなあと、不思議に思います。

息子が生まれたときには、これ幸いと、一度は遠のいた物語の世界に、もう一度、今度は息子と一緒にどっぷりと浸かりました。その息子が、なぜか、大学でドイツ語を学び、それがこの日独協会とのご縁となりました。

久しぶりに、ドイツ語やドイツの事情にふれて、様々な刺激を得ています。



河野会長のドイツ訪問記 ～ドイツへの夫婦旅(中 その2)～



(『Neues in Nara Nr. 93』からの続き)

2025年5月28日

アイゼナハを出て小一時間でエアフルトに到着。この町もドイツの中世がそのまま残るような町である。エアフルト大学は1379年にできたドイツ最古の大学だという。

先ずひとときわ高く聳える大聖堂に向かう。ゴシック建築の代表的なドームで、中のステンドグラスも見事だった。お昼も過ぎ、雨が降り出したので広場に出てレストランを探す。「梨」と漢字で書いた看板が目につき、行ってみるとなんとお寿司屋さん。こんなところにと訝りながら中を覗くと、しゃれた感じの店だったので騙されたつもりで入ってみる。板前さんはドイツ人。何でも長野のどこかで修行したといい、十分私たちの口に合うものだった。マトイス夫妻(*注)もドイツではなかなか食べたことがないと感激している。値段は少し高めだったが、ドイツのど真ん中で出会った日本の寿司の味は格別だった。

*注 マトイス夫妻(ユルゲンさんと桂子さん)はビーレフェルト独日協会の会長夫妻で、河野夫妻の滞独中、車で街々を案内してくださいました。詳細は前号参照。

エアフルトは橋の両側にカラフルな家が立ち並ん

だ独特の景観が有名で、その一角で午後のティータイムをし、大型スーパーに入ってグミなどの雑貨を買う。日本と違って何でも大型だ。レジに並んでいると、袋は持っていないのかとギロリと睨まれた。ような気がした。勿論こちらの一方的な思い込みだろう。

再びアウトバーンを走り、夕方ヴァイマルに到着。第一次大戦後に制定されたヴァイマル憲法は、この町の国民劇場で発表されたのでこの名前があるのだという。国民劇場の前の広場ではゲーテとシラーの銅像が出迎えてくれた。

ヴァイマルはドイツ古典主義の中心地として世界遺産に登録されており、18世紀末から19世紀初頭の建物が随所に残されている。夕方5時過ぎだったがまだゲーテハウスは開いていたので見学をする。ゲーテが住んだ家が保存され、立派な博物館が併設されている。圧巻はゲーテの臨終の部屋。赤いカバーのベッドと脇に小さな肘掛け椅子が置かれていた。ゲーテはその肘掛け椅子に座ったまま亡くなったという。「もっと光を！」は最後の言葉として有名だ。ゲーテの家を辞して、町の中心部にあるシラーホテルに宿を取り、些か文豪と詩人の気分を味わいつつ眠りについた。

次号に続く

河野 良文 奈良日独協会会長

● 会員異動

入会 坂上颯亮さん・志保さん(家族会員)

田中良委さん 高田富美さん 亀山芳典さん

退会 谷掛駿介さん・富美子さん(家族会員)

牧野善光さん(日本ベーリンガー・インゲルハイム元役員)

阪本京子さん

◇◆編集後記◆◇ 2026年6月24日に「西日本地域日独協会連絡会」が開催され、奈良日独協会を代表して、松本俊郎理事と参加してきました。次号で報告いたします。 『Neues in Nara』編集担当：横山 香 理事